

書 評

小林 茂 編

『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域
—「外邦図」へのアプローチ—』

大阪大学出版会 2009年2月 496頁 7,600円+税

編者の小林は、外邦図研究プロジェクトを組織し、『外邦図研究ニューズレター』を発行する一方、ここ数年間の地理学関係学会で「外邦図」について精力的に研究発表を行い、それは現在も継続中である。また、編者らのこうした地道な活動は、最近になって評者の知るだけでも、菊地正浩『「地図」が語る日本の歴史—大東亜戦争終結前後の測量・地図史秘話—』、暁印書館、2007や牛越国昭『対外軍用秘密地図のための潜入盗測（第1編）外邦測量・村上手帳の研究』、同時代社、2009といった関連研究の出現も加えて、地図学や地理学、あるいは軍事史等をめぐる関係者の「外邦図」への関心を促すことになった。その一部を拝見・拝聴し、それら研究成果の集積を期待していた一人である評者にとって、本書はまさに待望の一冊であった。

まず、巻末の執筆者紹介を見ると、そこに連名した研究者は実に34名（編者を含む）、本書に執筆していない関係者を加えれば、その数はさらに増すことになろう。まさに学界あげてのプロジェクトであり、それによって数多くの貴重な情報や資料が散逸を逃れたことはご同慶の至りである。

本書は各々2～5つの章を含むⅠ～Ⅷ部から構成されており、各章がほぼ独立した論文（記事）の体裁を採っている。そこで、本稿では、書評の倣いに従いつつ、原則として紙幅の関係を考慮しながら章単位で、その内容を要約し、適宜論評を加えてゆきたい。

まず、編者は「はしがき」の冒頭で、1945年8月までに日本がアジア太平洋地域で作製してきた地図を「外邦図」とよび、その研究にあたって「残された地図の検討から始め」たことを本研究全体の特色だとする。このプロジェクトでは、本書に先立って東北、京都、お茶の水女子の各大学で「外邦図目録」が刊行され、さらに劣化の著しい原本保護のためにデジタルアーカイブ化も同時

に進めたことを述べている。

「第Ⅰ部 外邦図とは」は、2つの章から構成され、本書で扱う「外邦図」を定義しつつ、基本的な分析の枠組みを提示する役割を担っている。

第1章「近代日本の地図作製とアジア太平洋地域」（小林）では前述の外邦図の位置づけが「日本」中心主義的概念だと述べ、日本の諸機関に2万数千種以上の多様な図幅が収蔵されており、その種類は多岐にわたると指摘する。そして、その研究史を4類型に整理して全体の構成を提示し、本書全体の見取図を的確に示している。

また、第2章「外邦図の嚆矢と展開」（清水靖夫）では、外邦図を、その描写地域が内邦化したもの（Ⅰ類）、軍事目的で作製したもの（Ⅱ類）に区分し、地図一覧図を含めて大観した。清水の分類は的確だが、その根底にある各地域の統治制度の差違に言及すれば、より説得力が増したであろう。この点は後述することにした。

「第Ⅱ部 外邦図の所在と特色」は、内外の所蔵機関の状況や経緯に関する4つの章から構成されている。

まず、第1章「日本および海外における外邦図の所在状況と系譜関係」（久武哲也・今里悟之）では、日本および海外における外邦図所蔵状況とその経緯を大観し、日本では浅井辰郎の役割の重要性を強調しつつ、特にアメリカ合衆国における所蔵状況を詳報している。資料公開の進んだ合衆国と併せて、今後は中国の档案馆やロシアのアルヒーフ等の関係国の文書館施設でも、本章と同様の調査が進むことを期待したい。

第2章「国立国会図書館所蔵の外邦図」（鈴木純子）は、国立国会図書館のコレクションが、1960年代に受け入れた外務省や国土地理院移管分を軸に、80年代に参議院図書館や東京地学協会旧蔵分、21世紀に入って浅井辰郎保管の資源科学研究所旧蔵分を各々加えて成り立っていることを報じた。そして、NDL-OPACでの検索方法の確立や地図一覧図の所蔵状況も概説している。

第3章「在アメリカ外邦図の所蔵状況」（今里・久武）は、アメリカ合衆国の主要所蔵機関である首都ワシントンDC議会図書館（LC）とアメ

リカ地理学会地図室 (AGSL) での調査結果を整理し、日本に未所蔵の旧ソ連と中ソ国境地帯の図幅や兵要地誌図が合衆国に残存することなどを、およそ5点に整理し、その背景を考察した。

第4章「旧日本軍撮影の中国における空中写真の特徴と利用可能性」(長澤良太・今里・渡辺理絵・岡本有希子)では、上記LCの調査で偶然発見した旧日本軍の中国における空中写真をデジタルデータ化し、Google Earthを活用することで現地比定した作業について報告している。

「第Ⅲ部 外邦図の構成」は、本書で「外邦図」として扱う図版のうち、主に外邦図Ⅰ類に属するものを中心に、5つの章を構成して多様性を明らかにしている。

第1章「陸地測量部外邦図作製の記録」(長岡正利)は、外邦図の作製状況を「一覧図」に着目して解明し、戦時の野戦測量、特に満蒙における密測とその犠牲にも言及しつつ、章末で外邦図が第二次世界大戦で十分に利用されたのか、という根本的疑問を呈している。本章とともに前述の牛越『対外軍用秘密地図のための潜入盗測』を併読すれば、筆者の論点である「外邦図」の作成がいかに相手国の主権を冒す行為であったのか、をより実感することができるであろう。

そして、他の4つの章はいずれも清水の執筆である。第2章「台湾の諸地形図について」は、台湾の地形図を、①迅速測図・仮製地形図類、②基本図類、③編纂図類、に大別し、その作製状況を整理し、一般に中央山地部の作製が遅延気味で、東西兩岸の作製が進んだことを明らかにした。

第3章「日本統治機関作製にかかる朝鮮半島地形図の概要」は、朝鮮半島の地形図を、①5万分1地形図、②2.5万分1地形図、③1万分1地形図、④小縮尺編纂図、⑤その他、に分類し、①では近年の岡田郷子の研究で日韓併合前の作製状況が明らかになったとしている。

第4章「樺太の地形図類について」は、樺太の地形図を、①仮製樺太南部5万分1、②2.5万分1樺太空中写真測量要図、③5万分1樺太空中写真測量要図、④5万分1地形図、⑤1万分1図地形図類、⑥5千分1図、⑦北樺太2.5万分1図、⑧編纂図、の8類型に区分した。日本の公式植民地3地域のなかでは圧倒的なヴァリエーションの多さを誇っている。但し、⑦は外邦図Ⅱ類であり、

区別して考えるべきものと思われる。

第5章「北方領土・千島列島の地形図類」は、北方四島・千島列島の地形図を、①5万分1地形図、②陸海編合図、③20万分1図類、の3類型に区分するとともに、①について1990年代作製の衛星資料による補筆やリプリント版までフォローしている。

「第Ⅳ部 外邦図の作製過程」は、5つの章によって外邦図作製とその周辺事情を明らかにした。

第1章「植民地化以前の韓半島における日本の軍用秘図作製」(南 綦佑)は、日清戦後の「朝鮮略圖」の作製過程と国家主権無視のいわゆる「盗測」の実態を解明した。また、短期間に地図を作製する簡易測量の方法が、開拓期の北海道の地図作製や、関東地方の迅速測図および京阪地方の仮製図の作製経験で蓄積されたとした指摘は、説得力ある説明で、地図作製史を考えるうえでも示唆に富む内容であろう。しかし、そうした目録による簡易地図は谷の奥部を中心に誤差や歪曲が多いことへの留意も促した。

第2章「アジア太平洋地域における旧日本軍および関係機関の空中写真による地図作製」(小林・渡辺・鳴海邦匡)は、実態の不詳であった第二次世界大戦前の空中写真測量による地図作製が、第Ⅱ部第4章の合衆国での偶然の現物発見によって、中国を主に、その後東南アジアや太平洋地域へと拡大していたことが明らかになったとする。そして、作製地図の考察から、旧日本軍の空中写真撮影が偵察用より地図作製用だとする結論を示している。

第3章「近代東アジアの土地調査事業と地図作製」(小林・渡辺)は、植民地の近代的土地所有を基礎づけた大規模な土地調査事業と地籍図や地形図の関係を明らかにした。特に沖縄県と台湾における土地調査事業をめぐる技術者として目賀田種太郎の役割に着目することで、その技術移転に関わる問題も提起している。

第4章「日本の兵要地誌に関する一研究」(源昌久)は、軍事行動の地理的側面において外邦図と「両輪の役割」を担うという兵要地誌を、①総合的あるいは系統的な兵要地誌に関する理論や戦略を考察するタイプ、②特定の主題に焦点を決めて研究するタイプ、③兵要地誌の研究を軍事地域

に応用するタイプ、の3類型に区分可能とし、その作成マニュアルや編纂組織の存在を示唆した点が興味深い。しかし、本章の主題である外邦図との「両輪」関係について、より詳細な説明があるとよかったように感じた。

第5章「南西太平洋方面における地図資料」(田中宏巳)は、制空権を失いつつあるなかでの南方戦線では、社会経済的発展地域と未開発地域の間、入手できる地域情報に格差があったとする。そして、作戦の立案において海岸線さえ判明すれば充分とする海軍の立場と、内陸部の詳細情報を必要とする陸軍の立場の間の葛藤に着目し、南方戦線では海軍が戦闘に主導性をもったがために前者が優先され、地図作製が放置されたという。それが兵力消耗に帰結したとする指摘は、軍事史に疎い評者には異説として興味深く思われた。

「第V部 終戦直後の陸地測量部と水路部」も5章から構成されるが、第1～3章が講演録の体裁を採っている。それらは「外邦図」と、その関係領域に直接関与した当事者の回顧録で、しかもその後本書の刊行までの間に鬼籍に入られた方もあり、編者らの活動が時間との闘いでもあったことを物語る貴重な「時代の証言」となっている。

終戦直後の陸地測量部関係者の塚田建次郎・富澤章を迎えた第1章「終戦前後の陸地測量部」では、終戦直後の地図焼却指令と実施状況、当該期の地図製版と印刷状況、「軍事機密」や「軍事極秘」等の意味、地図印刷の民間会社への外注状況、多色刷図の複製印刷技術、陸地測量部内での分掌関係、陸海編合図と地図一覧図の整備、高山市への印刷機搬出計画、米軍の地図接收等の終戦直後の陸地測量部地図をめぐる貴重な証言である。

第2章「終戦前後の地図と空中写真、見聞談」は、当時陸地測量部に関与した佐藤久の語った空襲激化のなかで米軍上陸想定地の地形調査や、戦後日本写真測量学会(第一次)の創設・始末記を記録している。

また、第3章「第二次世界大戦中の機密図誌(海図・航空図)」では水路部に勤務した坂戸直輝が、海軍の目録である『普通水路圖誌目録』や『急速覆版海圖目録』等を紹介し、1961年頃の米海軍水路部留学時代に見聞したチャートライブ

ラリーの状況も語っている。そして、戦中期に航空図へのカタカナ地名記入において、当時第一線の地理学者の関与があったという証言は、日本の地理学裏面史としても興味深い。

第4章「史実調査部と地図の行方」(田中)は、敗戦直後の米軍による陸海軍省資料の接收と両省が実態の復元・記録にあたるべく設置した史実調査部との関係を明らかにしている。そのなかで地図や兵要地誌が、史実調査部と地理調査所の協力の下に、GHQの監視を潜って防衛庁戦史室へ寄託されたことを述べている。

第5章「参謀本部からの外邦図緊急搬出の経緯」(田村俊和)は、敗戦後に参謀本部から東北大学および資源科学研究所への外邦図の緊急避難の経緯と、それに関与した田中館秀三、多田文男、渡辺正(陸軍少佐)の三者の相互関係を述べた。そして、戦中期に南方軍囑託として田中館が外邦図の資料的価値を熟知していたこと、それを踏まえて学生たちに避難時の補助を要請していたことを記している。

「第VI部 兵要地理調査研究会」は、外邦図研究の周辺史として、地理学史上でも謎多き存在として知られてきた兵要地理調査研究会を多面的に明らかにした。

第1章「『兵要地理調査研究会』について」(久武)は、ドイツおよびアメリカ合衆国における地理学と軍事との関係をベースに、日本の「兵要地理調査研究会」の成立過程を、渡辺(邊)正氏資料等の活用で掘り起こして比較考察した意欲作である。小牧実繁の率いた京都帝国大学文学部地理学教室が地政学研究へ組織的に関与していたことは周知の事実であろうが、地理学界あげての研究組織という兵要地理調査研究会を解明した点は、日本地理学史の空隙を埋める貴重な成果といえよう。それらを本章から学べば、終戦後に京都帝国大学の地理学教室のみがなぜ解体の危機に瀕したのか、という疑問も改めて生じてくる。

第2章「兵要地理資料集録(渡辺正氏資料)解説」(高木 勲)は、その渡辺資料の内容を6期に時期区分しつつ解題した。これまでのアカデミー地理学史ではほとんど無名で、編者らの研究により照明の当たってきた渡辺(邊)正が、相当な地理(学) 轟辰らしいこともうかがえた。

第3章「陸地測量部から地理調査所へ」(金窪

敏知)は、1869年民部省戸籍地図掛設置から現在の国土交通省国土地理院に至る地図行政を概観した。特に戦中・戦後動乱期に陸地測量部の長野県への疎開、GHQ占領下で内務省への移管工作機関としての地理調査所を経て、戦後の国土地理院に至る裏面史が興味深かった。ここでも「地理調査所」の命名が前述の渡辺の発案であると記しており、本書を通じて戦中・戦後の地図(地理)行政が渡辺の存在抜きには語れないらしいことを知ることができた。

「第Ⅶ部 外邦図デジタルアーカイブの構築と公開」は、一転して将来の外邦図の公開に向けて直面した現実的問題を多角的に論じた内容である。

第1章「外邦図デジタルアーカイブ構築の経過と今後の課題」(村山良之・照内弘通・山本健太・関根良平・宮澤 仁)では、酸性紙に印刷された外邦図は劣化が著しく、デジタル化を不可欠と述べた。それを踏まえ近年の主要所蔵機関の所蔵調査や図幅交換等を経て、スキャナ処理による損傷低下方法の模索、さらにはデジタルアーカイブ化を進めるうえの問題点を整理している。

第2章「外邦図デジタルアーカイブの公開に関する課題」(宮澤・村山・小林)は、外邦図を「古地図」扱いする日本に対し、その描写する現地の国家では必ずしもその認識は妥当するとは限らず、それがデジタルアーカイブでの公開の制約につながっているという。特にⅡ類に属する外邦図を中心に、「盗測」や「鹵獲(ろかく)」によって作製した図幅のデジタル公開にも慎重さを要するという点は、看過できない問題であろう。

「第Ⅷ部 外邦図の利用」は、Ⅶ部を踏まえつつ、現在の現地調査に外邦図を活用する場合の実際の問題点を整理している。

まず第1章「外邦図は『使えるか?』」(石原潤)は、アジア地域での豊富なフィールドワークの経験を踏まえ、中国研究での使用2例と、インド・バングラデシュでの使用1例をあげて、外邦図を用いた研究上での問題点、あるいは地域差を述べ、その主な活用方法が景観変遷的研究や歴史地理学的研究にあるとしている。

第2章「地域環境変遷研究への外邦図の活用」(田村)は、外邦図主要所蔵機関の1つである東北大学での公開利用状況からの報告である。そし

て、外邦図の「非軍事的」価値への認識が浸透し、最もベーシックな旧景観の観察に関する利用はもとより、地形や植生変化の考察への活用の可能性にも言及している。

第3章「韓国における外邦図(軍用秘図)の意義と学術的価値」(南・李 虎相)は、国家主権を奪われ盗測的測量をされた当事国側の論理からその意義と価値を明らかにし、韓国の景観復原的研究への有用性をもつ一方で、外邦図の内包する潜在的な日本中心主義への配慮も喚起した。

第4章「Urban Monitoring Using Former Japanese Military Maps and Remote Sensing」(J.T. SriSumantyo・I.IndreswariS.・R.Tateishi 原文:英文)は、1950年代以後急速な人口増加を遂げたジャカルタ市街地の拡大の起源を、外邦図の活用で復原し、それらと現代地図情報をGISで結合することで、その景観の変遷を地図化から解明した成果を報告した。

そして、最後にプロジェクトの活動記録、初出一覧、および小林による「あとがき」を付した。

本書を前に評者は、かくも大人数の多種多様な報告を、とにかくまとまりある一書に集成された編者のご苦勞に、まずは敬意を表したいと思う。一方で志し半ばで病に斃れた共同研究者の久武の無念も思わずにはいられない。そして、労作とよぶにふさわしい本書は、第Ⅴ部を典型に多数の貴重な証言を記録し、後世に残した意義が何より評価されるべきであろう。近年、さまざまな分野でオーラルヒストリーの可能性が指摘されているが、本書は紛れもなく地理学史におけるその可能性を実証した書でもある。

そこからは「戦時体制期」という特殊事情下とはいえ、アカデミー地理学が学術研究や学校教育にとどまらない活動を展開していたことを知ることができる。その成否や良否はともかく、近年の社会貢献を模索する学界にとっても、かつての足跡から学ぶべき点は少なくないはずである。

そして、敢えて望蜀の念を付加するならば、まずは本書の巻頭近くに帝国主義下のアジア太平洋地域の支配体制を概観する1章があれば、各章の理解を助けたであろうことをあげたいと思う。

本書の提示する外邦図の類型は、まずその対象地域に大日本帝国の統治権が及ぶ公式植民地のもの(Ⅰ類)と、及ばない地域のもの(Ⅱ類)の差

から生じており、また各々の類型も統治権の时期的推移に影響されていたことが随所に認められるように思われた。満洲事変以前にいわゆる植民地「満洲」が関東州や南満洲鉄道附属地との集積から成っていたこと、シベリア出兵にともなってサハリン島の北部を日本軍が保障占領していたこと、さらには第二次世界大戦中には東南アジアに多数の占領地が存在したこと、等は、もはや読者に「常識」として求めることが困難な特殊な部類に属する知識であろう。

そして、本来帝国日本の主権のおよんだⅠ類の地図を、「外邦図」の概念に含めるべきかどうか議論の余地があろう。これらの地図の描写する範囲は、少なくとも一旦は国際的に日本統治が認められていたところであり、草創期はともかく、一時は安定した治安状態のもとに測量が可能であった地域である。それらを、Ⅱ類として「盗測」や「鹵獲」による外国製地図の改変や複製からの作製を余儀なくされた地図と、同じ「外邦図」という共通の括りに含めることが適切なのか、どうかは議論する余地を残している。要するに外邦図の内容や様式は、それほど描写地域の支配体制に影響されるということでもある。

つぎにやや些末な点であるが、Ⅰ類に属する外邦図では、特に樺太で多くのヴァリエーションの外邦図が作製されていた。それを、樺太のもつ

「内地性」ゆえに測量が容易であったためと考えるか、それとも国境地域という地政学的位置から多数の地図を必要としたと考えるかで、その意味づけは大きく変化するであろう。

また、評者には、終戦時の外邦図の緊急避難に多大な貢献のあった田中館が、第一次世界大戦時の青島におけるドイツ軍の資料散逸状況を見た反省から、そうした行動をとったと述懐していたとする叙述(384頁)が殊のほか興味深く記憶に残った。そして、その青島での田中館の体験自体が、当時日本軍による同地の占領によって現れた出来事でもあったのである。

最後に、地政学を通じた戦中期の軍事協力への反省から戦後の日本の地理学界では、長らく本書のような研究対象への接近を忌避してきたとする言説がある。しかし、本書の多くの証言が裏づけるように、外邦図を終戦処理から救ったのは、関係者がそれらにいち早く「非軍事的」価値を見いだしていたからにほかならない。戦中期の地理学界の社会的活動をすべて地政学と関係づける言説や、それを学史的に是認する姿勢に対しても、本書は再考を促しているように思えてくる。

それらの点を踏まえて本書を手に、その言説の真偽も問い直しつつ、いま一度戦後の日本地理学史を再考してみたい、というのが評者の読後感である。(三木理史)